

# TAMABI NEWS

Tama Art University News Magazine

vol.102

言語を超えて人々を魅了する

## 世界で輝く力

企業人事・卒業生に聞く  
イトーキ／カゴメ／京セラ





言語を超えて人々を魅了する

# 世界で輝く力

アートやデザインそして身体表現など、創造することによって生まれる新たな価値やムーブメントが、時に国境や言語を超えて人々の心を揺さぶり魅了します。自分の可能性を信じて、世界というフィールドにチャレンジし成功した卒業生たちにスポットを当て、世界で輝くために必要な姿勢や原動力について探っていききたいと思います。

## ロンドンのヴィクトリア＆アルバート博物館に モダンな振袖と西陣織帯が永年収蔵

着物・オブジェ作家

重宗玉緒 SHIGEMUNE Tamao | 06年テキスタイルデザイン卒業



- 海外で活動するきっかけは
- 誘われたパリでの合同展

アナログでの絵画制作と、その絵画を元にデザインしたテキスタイルで着物や帯、オブ

ジェを制作することを中心に活動しています。私にとって着物は単なるプロダクトではなく、自分の世界観を表現するための媒体。その特性を活かしてストーリーを紡ぐことができる点に魅力を感じています。

私が創作のメインテーマとして掲げている

のは、「メメントモリ(=死を想え)」という言葉です。もともと死生観や宗教観に興味があり、多摩美の卒業制作で振袖をデザインした際にこのテーマを選びました。当初はこの言葉が持つ暗いイメージに沿って制作していましたが、さまざまな経験を重ねテーマを深

めていくうちに、「最後に死が待っているからこそ、今をどう楽しむのか？」というメッセージを投げかけたいと考えようになりました。現在のカラフルな作品には、生死をポジティブに捉える世界観が反映されています。

近年は海外での活動にも積極的に取り組んでいます。そのきっかけとなったのは2016年に参加したパリでの合同展でした。それ以前にもニューヨークやメキシコをひとりで旅行したことがあり、現地の芸術や死生観に衝撃を受け、異文化から影響を受けた作品を海外で展示したいという思いが高まっていました。そんな時、国内のイベントを通じてフランス在住のアクセサリ作家と知り合い、思い切って相談したところ、パリで行われる合同展に声をかけてもらいました。パリでの刺激的な経験が忘れられないなか、2018年にはロンドンにあるヴィクトリア&アルバート博物館に作品『Engagement ribbon (振袖)』と『鱗 (西陣織帯)』が永年収蔵されることに。私自身も渡英するチャンスを獲得し、クラウドファンディングで資金を募って現地での撮影や展示を行いました。当時はスウェーデン・オランダ・フランスなどを巡回したほか、それ以降も世界各地で活動を実施。直近ではメルボルンの州立美術館にも作品が収蔵され、私も渡航してトークセッションなどを開催しました。私にとって世界に飛び出すことは、自らの表現を多くの人々に発信すると同時に、新しい価値観に触れて表現の幅を広げる機会にもなっています。

## ● 行き詰まった状態が一変した ● アンティーク着物との出会い

幼少期から絵を描くことが好きで、美術教

師だった母親の影響もあって美術大学に進むことを決めました。1年間の浪人を経て多摩美のテキスタイル科に入学しましたが、雑誌からカラーチップを切り取る、あちこちからテクスチャーを収集するといった1年次のカリキュラムに面白さを見出せず苦勞したのを覚えています。また、少しでも失敗すると仕上がりが変わってしまう染色にも難しさを感じていました。大きな挫折感を味わいつつ、ほかにできることも浮かばない。そんな状況に陥った時、大正末期・昭和初期のアンティーク着物を本で見、そのデザインに心を掴まれました。自分でも着物を着ようになり、大学の課題で着物や帯を制作。着物と出会ったことで創作の楽しさを知り、在学中は染色の技法や繊維加工を幅広く学びました。

今になって振り返ってみると、ひとつのテーマに沿って素材やデザイン、色彩を選んでプレゼンする1年次の授業は、アートディレクションも含めて作品を展開する現在の活動に不可欠な視点を養ってくれました。その点、「着物」の制作と出会えたことも含めて大学生活で得たものは大きかったと感じています。

## ● 海外の方が自由な表現を ● フラットに受け入れてくれる

今後の目標は、国内外を問わず美術館で個展を開催することです。絵画作品をはじめ、それを用いた着物やオブジェ、ビジュアルアートなどを組み合わせて展示することで、テーマや世界観をより深く伝えたいと考えています。海外での活動を通じて実感しているのは、「着物」に対する受け止められ方の違いです。日本では工芸や伝統文化として見られることが多いのに対し、海外では日本のポ



ップカルチャー・ファッションのひとつとして捉えられることが多い。そのため、着物を用いた自由な表現をフラットに受け入れてくれやすいのです。私の基本的なスタンスは、“伝統を尊重し学びつつも、自由に創作する”。着物のスタイルやルールはありますが、それをどこまで変形すると着物だと認識されなくなるのか。そんな問いを起点に、洋服との組み合わせや形状の拡張など、着物の概念を広げる試みに挑戦したいと考えています。

● しげむね・たまお  
● 多摩美術大学在学中にアンティーク着物にのめり込み、着物・帯の制作を開始。パリやロンドンにて合同展に参加し、2018年にはロンドンのヴィクトリア&アルバート博物館に振袖と西陣織帯が永年収蔵される。同博物館にて開催された展覧会はスウェーデン、オランダ、カナダへ巡回した。



中下：卒業制作で作成した着物作品、右：ヴィクトリア&アルバート博物館に収蔵された『Engagement ribbon (振袖)』

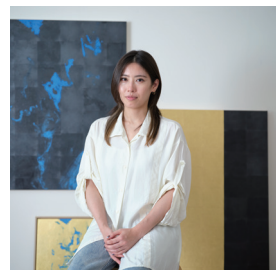


『Incandescence』

## ヘルシンキやロンドンで個展を開催するほか ニューヨークや上海ではグループ展に参加

画家

長谷川幾与 HASEGAWA Kiyo | 11年大学院日本画修了



### ✧ 日本に限らず発信していけば ✧ 見る人は見てくれている

在学中は3年生くらいまで花やクラゲのモチーフを描いていましたが、「精神性を描きたい」と思うようになってからは、自然と抽象で描くようになりました。その後、スタイルを肯定してくれるギャラリーとの出会いもあって、自分が描きたいものをより強く出せるようになったと思います。

『deliverance』



今は所属ギャラリーを通じて、アメリカ、イギリス、オランダ、中国、台湾などのアートフェアに月1度のペースで出品しています。現地に行くのは3か月に一度くらいで、制作は日本で続けています。制作のインスピレーションを仏像や神社、時には教会から得ることもあるのですが、海外のほうがスピリチュアルなイメージを宗教的なものではなく、自然に受け止めてもらえるように感じています。

外国で初めて個展を開催したのは、多摩美の大学院在学中に短期留学をしたフィンランド・アアルト大学の付属ギャラリーでした。日本画のない土地での反応に興味がありましたが、意識せずとも「日本人であること」が自然についてくると実感し、それからは無理に抗わずナチュラルに表現しようと思いました。私はもともと考えすぎて悩んでしまうタイプでしたが、外的な情報をなるべく排除し、自分の奥の奥にある部分を描こうと思ったのです。それは比較を通じて大事なものを見極め、そぎ落としていく作業でした。

大学院の卒業後は、IT系企業で社長のアシスタントを経験しました。そこで、私の作風

を踏まえて「海外を意識したほうがよい」という助言を受け、InstagramやYouTubeで英語による発信を始めました。おかげで現在のギャラリーや、ポーラ美術館で開催された展覧会「シン・ジャパニーズ・ペインティング—革新の日本画」などに声をかけていただき、「WOMEN on the FRONTIER 2023」への選出にもつながりました。そのときに感じたことは「見る人は見ている」ということ。最初は評価をしてくれる人がいないということも、もしかしたらあるかもしれませんが、ですが、SNSの時代において、質の高い作品であれば必ず人に届くと信じています。だからこそ、万人に理解されやすいものを意識的に描くよりも、自分の表現の精度を高めることが重要だと私は考えています。

● はせがわ・きよ  
● 多摩美術大学を卒業後、アアルト大学（フィンランド）短期派遣交換留学を経て、多摩美術大学博士前期課程美術研究科日本画領域修了。ヘルシンキ、ロンドン、ニューヨークなど海外で多数の個展開催やグループ展参加を経験し、2023年にはHarper's BAZAAR「Women on the Frontier」を受賞している。

## 企画・アートディレクションを手がけた作品が 国際的な広告賞「NY ADC賞」などを受賞

アートディレクター

宮崎琢也 MIYAZAKI Takuya | 20年グラフィックデザイン卒業



### ● 国際コンペが拓いた世界への道 ● 次なる目標はゴールドライオン

世界を意識するようになったのは、国際的な広告賞に参加したことがきっかけです。広告代理店では、若手がコンペで成果を残すことがひとつの登竜門。ヤングカンヌやヤングロータスに出場して、世界中に真剣にクリエイティブに向き合う同世代の人間がいることを知り、視野が一気に広がりました。

グラフィックデザイン科に入学したときから、広告代理店でデザイナーになることを目標に、逆算して動いていました。1年次から大手広告会社のインターンに挑戦。早く実践

の現場に触れることで、自分の可能性を試したかったのです。在学中は「もしポスターが動いたら？」とインタラクティブな表現に興味を持ちました。ビジュアルを作るのが上手な同級生がたくさんいたので、別なところで勝負をしなければ、と早々に指針を決められたことは大きかったです。

卒業後は博報堂に入社し、家電メーカー「ツインバード」のリブランディングや味の素の新規事業立ち上げなど、長期的に企業と伴走する仕事を経験しました。2023年からはTBWA\HAKUHODOに出向し、アディダスやマクドナルドといったグローバルブランドの案件を担当しています。社が掲げる「ディスラプション（創造的破壊）」という理念は、“そもそも”を問い直す自分の性分に合っていると感じています。

代表的な仕事のひとつが、日本フィルハーモニー交響楽団の『The Symphony Plotter』です。従来の見立て型ポスターから離れ、音に反応してペンプロッターが踊り、そこからビジュアルを生成する仕組みを考案しました。社内エンジニアと検証を重ね、展示では実機を動かして、コンペでは映像で仕組みを伝える。アイデアから伝達まで一貫して設計した結果、「NY ADC賞」などを受賞することがで



ペンプロッターが音に絵に変えていく

きました。英語は得意ではありませんが、「日本らしいデザインだね」と言われたときに、改めて、言語を超えるクリエイティブの力を確認して、自信にもなりました。

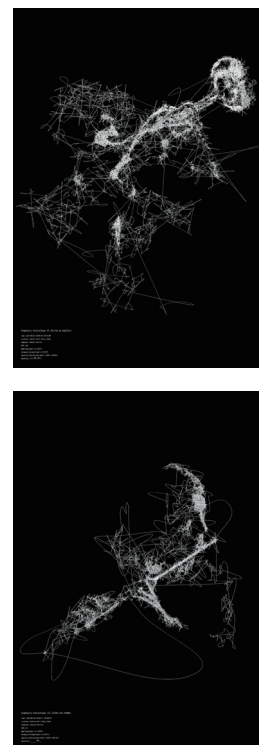
直近の目標はカンヌライオンズでゴールドを獲得すること。指標が明確であるほど、日々の仕事も自然と研ぎ澄まされます。辿り着きたい場所を意識して、アンテナを張りながら小さな一歩を踏み出し続けていきたいです。

● みやざき・たくや  
● 多摩美術大学を卒業した2020年、博報堂に入社。現在はTBWA\HAKUHODOのアートディレクターとして、幅広いプロジェクトに携わる。2025年、企画・アートディレクションを手がけた『The Symphony Plotter』は、「第104回 NY ADC賞」のほか、「Spikes Asia 2025」など複数の賞を受賞した。



『The Symphony Plotter』の演奏解析

『The Symphony Plotter』によって生成されたポスター



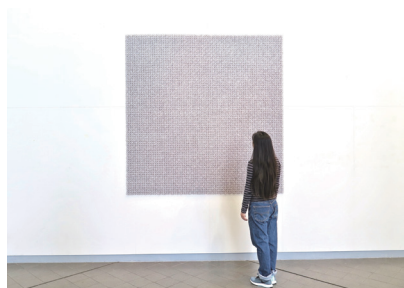
## アーティスト・イン・レジデンスを中心に 世界各国でファイバーアートを制作

ファイバーアーティスト

富田紀子 TOMITA Noriko | 10年大学院テキスタイルデザイン修了

### テキスタイルを多角的に捉え 海外での評価につながった

ファイバーアーティストとして海外を中心に活動する私の原点は、多摩美の図書館で出会った数多くの作品集でした。そこで初めてファイバーアートに触れ、日本ではほとんど存在しなかった展覧会やコンペティション



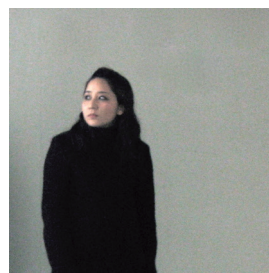
ビニールチューブで制作された『Universe』

が海外には数多くあることを知り、自分も挑戦したいと思うようになったのです。以来、リトアニア、イタリア、ベルギーなど、さまざまな国で作品を発表してきました。

海外で評価されているのは、テキスタイルを「布の成り立ち」から探究を続けている点です。一般にテキスタイル・ファイバーアー

トは糸や繊維素材を用いた表現を指しますが、私にとってその本質は素材から多角的な表現につなげていくことにあります。経糸と緯糸の構造を念頭に、あらゆる素材で表現が可能だと考えています。大学院時代に手けた『群がる』(2009)という作品は、その最初の結実です。ふと網戸を眺めて「これは経糸と緯糸の構造だ」と気づき、網戸用メッシュを解体して、縫うでも編むでもなく、繊維の交わりそのものから形を立ち上げました。その後も、スズランテープを用い、風の強さや向きに応じて色彩が移ろう『シャングリラ』(2014)、ビニールホースのパーツを組み合わせた『Universe』(2015)など、主に日用品を起点とした作品を展開してきました。さらにチリ・アタカマ砂漠で制作した『大地を織る』(2023)では、人の影を経糸、並べた石を緯糸に見立て、朝の限られた光でのみ成立するインスタレーションを制作しました。

こうした表現の基盤には、多摩美での学びがあります。1年次は糸や染料、布といった素材そのものに向き合うことから始まりました。デザインや表現は、素材への深い理解の上に成り立つという姿勢が、私を既存の枠にとらわれない制作へと導いてくれたのです。日用品をはじめ、あらゆるものを素材として捉え、可能性を見出すためには、既成概念か



上：ポルトガルでのアーティスト・イン・レジデンスで制作された『手の記憶』(2024/© contextile)、下：『大地を織る』

ら自由になることが欠かせません。そして大量生産の工業製品とは異なり、私の制作では身体感覚を何より大切にしています。たとえ短期間で仕上げた作品であっても、その背後には長年の経験と感覚が息づいています。世界を惹きつけるのは、手仕事と独自の視点から生まれる唯一無二の表現なのです。

現在はドイツのアーティスト・イン・レジデンス「Akademie Schloss Solitude」に滞在しています。ここでは国籍や専門を問わず多様な人々が集い、互いの表現や思考を交わすことができます。私にとって、こうした環境に身を置くことが新たな表現の模索につながっています。今後も先入観にとらわれることなく、自らの手でつくることから生まれる表現を発信していきたいと思います。

- とみた・のりこ
- 多摩美術大学でテキスタイルデザインを学ぶ中でファイバーアート(繊維芸術)と出会い、ファイバーアーティストとして日用品などを素材に用いた作品を制作。国内の芸術祭のほか、海外での展示やアーティスト・イン・レジデンスにも多数参加している。

スズランテープを用いた作品『シャングリラ』





## 世界最高峰のデザイン・広告賞である 「D&AD Awards 2022」など、多数の賞を受賞

ディレクター

石川結貴 ISHIKAWA Yuki | 18年メディア芸術卒業



### ●● 国際的な賞を射止めた ●● 髪で人生を描くコマ撮りアニメ

動画コンテスト「BOVA」用に制作した、タカラベルモントの動画『Hair Album』で、国際的なデザイン・映像の賞「D&AD Awards 2022」のクラフト部門でゴールドを受賞しました。テーマは「ヘアサロンで人生が変わる瞬間」。髪の毛を素材にしたコマ撮りアニメで女性の人生を描きました。見る人が楽しいと感じる、かわいらしくてやさしい世界観を映像で表現するのが得意です。この作品は、アニメーターと相談を重ね、線画ではなく人形で表現することに決めました。学生時代の経験が、コマ撮りならではの予期せぬ動きや粗さを表現する際に役立っています。言葉を最小限にし、人形の表情をあえて描かず、髪の毛そのものに感情を託す。その結果、国境を超えて多くの人の心に響く作品になったのではと考えています。

幼少期から『プリンプリン物語』といった人形劇番組に親しみ、高校時代はバンドのMVを繰り返し観るなど、とにかく映像作品に親しんできました。そこで、映像を含む幅広い表現を学びたいと考え、多摩美のメディア芸術コースに進学。在学中は初めて触れた

Adobe Premiere Proを使い、映像制作に夢中でした。社会人になると個人的な作品をつくる機会が減るため、学生時代に積極的に創作活動が続けることが、自身の能力向上にとって非常に重要だったと実感しています。また、在学中に非常勤講師の古屋和臣先生の仕事を手伝わせていただいたことも、大きな学びになりました。古屋先生がどんな作品も丁寧に褒めてくれたおかげで、今でも自信を持って作品を生み出しています。その経験が現在の仕事にも活かされていますね。

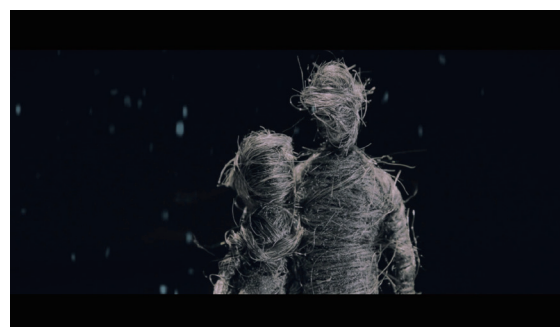
在学中は映像制作会社でアルバイトをしており、そこに現在の勤務先である太陽企画のディレクターが出向していたことが、入社の一きっかけでした。新人時代は先輩ディレクターのMV制作のアシスタントやメイキング映像の制作を担当。現在はディレクターとして出版社やホテル予約サイトなど、多ジャンルの映像コンテンツ制作を手掛けています。

今後は自分らしい手づくり感のあるアニメーション制作にも挑戦していきたいと思います。私の原点である遊び心を大切に、これからも多くの人をワクワクさせる映像をつくり続けたい。そのために作品を通して視聴者と向き合い、クライアントの要望にただ応えるだけではなく、見る人の感覚や楽しさを尊重した質の高い作品を届けていきます。

●● いしかわ・ゆき  
●● 2018年、多摩美術大学情報デザイン  
●● 学科卒業後、太陽企画に入社。クラ  
●● フト力の高い映像制作を得意とし、  
●● タカラベルモントのアニメーション  
●● 『Hair Album』は国内外で高く評価さ  
●● れ、多数の広告賞を受賞。企画から  
●● 演出まで幅広い分野で活動している。



『Hair Album』  
動画



『Hair Album』より。髪の毛だけで構成されたキャラクターに、動きや演出で感情が吹き込まれていく



左：B&B Italia『Grande Papilio』（Image courtesy of B&B Italia）、右：EMECO『ZA BAR STOOL』

## 「Collab Design Excellence Award」受賞 デザインで世界をリードし続ける

プロダクトデザイナー／多摩美術大学副学長

深澤直人 FUKASAWA Naoto | 80年プロダクトデザイン卒業



### デザインの役割とは、混沌から 秩序をすくい上げること

私は1980年にプロダクトデザイン学科を卒業後、諏訪精工舎（現セイコーエプソン株式

会社）での勤務を経て、シリコンバレーにあったIDTwo（現IDEO）で約8年間勤務した経験があります。そして、帰国後、IDEO日本支社を立ち上げた後に独立。主にヨーロッパの企業の仕事を手がけるようになりました。こうした海外での経験が、私のデザイン思想

に大きな影響を与えているのは間違いありません。

大学卒業後すぐに就職した諏訪精工舎は、時計業界における最高峰の技術者がおり、給料も高い。時計の部品をつくる工作機械も自作するような社風にも共感しました。ここで

### 深澤直人副学長に聞く「世界で通用する力」

#### 「他分野と融合しデザインの可能性を拡張させ 社会に新たな価値を創り出せる力が必要」

「世界で輝く力」という文脈では、2024年にアメリカ・ペンシルベニア州のフィラデルフィア美術館の提携団体Collabが主催する「Collab Design Excellence Award」という賞を日本人として初めていただくことができました。これを受け、2024年12月13日から2025年

4月20日まで、フィラデルフィア美術館で個展「Naoto Fukasawa Things in Themselves」を開催しました。現地を訪れ、ガエターノ・ペッシェ、ザハ・ハディッドなど、過去受賞者の顔ぶれを見て、改めて偉大な賞をいただいたのだと実感しました。

私はアメリカ、ヨーロッパなどでデザインの仕事を経験してきましたが、世界を舞台に活動するのは、決して特別なことではないと思っています。もし世界との接点がないと思うなら、それは「気づいていない」だけです。学生の皆さんには、ぜひ世界との接点を自ら見つける努力をしてほしいと思います。

私は現在、多摩美術大学副学長として、次世代のデザイナー育成にも力を入れています。2014年の統合デザイン学科設立に参画し、学科長を務めてから現在に至ります。もともと私は、「プロダクトデザイン」「グラフィック



左：セイコーウォッチ株式会社『ISSEY MIYAKE ELLIPSE』、中：HAY『MIZ WATER BOTTLE』（Image courtesy of HAY）、右：Molteni&C『CINAMMON』（Photo：井上昌明 Masaaki Inoue）

私は、デジタル部門に配属され、今までにない製品群のデザインを任されました。なかでもテレビウォッチ（テレビ付き腕時計）など、まだこの世にない製品をビジュアル化する腕を買われ、次第に社長直下で仕事を請け負うようになります。まだインターフェースデザインなんて言葉がなかった時代に、自力でこの分野を開拓していたわけです。

約8年勤務して、30歳になった頃、海外のデザインに憧れる気持ちが強くなっていきます。デザイン雑誌を見るとおしゃれなオフィスで働くデザイナーが紹介されている……。それは会社のライフプラン研修で示される未来像とは、ずいぶん違って見えました。もっと自由な環境でデザインをしてみたい——。そこで、思いきって、アメリカ西海岸のデザイン会社に移籍することにしました。

私が渡米した1989年は、Appleなど新興のIT企業が頭角を現した時期で、とにかく面白かった。ここで、コンピュータのインターフェースやデジタル機器、医療機器など、さまざまなデザインプロジェクトに携わりました。また、このときの同僚のひとりが認知心理学者で、彼女との議論を通じて、人間工学的なデザインのアプローチについても学ぶことができました。

アメリカ生活が7年を過ぎた頃、ふと自分のキャリアについて考えました。サンフランシスコの生活は実に快適です。気候もいい、

食材も豊富、街並みも美しい。ただ、すべてが整っていて、この街にデザインは必要ないと思ったのです。私は日本に帰国することを決め、その前にヨーロッパの巨匠たちに会いたいと考えました。するとIDEO社の創業者が、エットレ・ソットサス、ミケーレ・デルルッキといった憧れのデザイナーたちを紹介してくれたのです。1980年代の伝説的マエストロたちと直に会って話せたことは、貴重な学びであり、大きな自信になりました。

帰国後、ヨーロッパのデザイン業界からも声がかかるようになります。デザイン雑誌の特集をきっかけにして、ミラノサローネ（※）で注目され、30社以上から依頼を受けました。イタリア、ドイツ、フランス、スペインなど、ヨーロッパ各国のブランドと仕事をするなかで、「Power of Simplicity」を追求する独自のスタイルが確立されていきました。シンプルながら心地よく生活に馴染む。シリコンバレーで学んだデジタルの先進的なデザインとヨーロッパの伝統工芸の技が融合したアプローチがここに結実したのです。

同時に、「Without Thought（思わず）」という概念を提唱し、人間の無意識の行動に宿るデザインのきっかけを模索しました。当時手がけた「無印良品」の壁掛けCDプレーヤー、「au／KDDI」のINFOBARなどは、この考え方から生まれたものです。

私がデザインにおいて大切にしているの

は、「混沌とした世界から秩序をすくい上げること」です。突然の夕焼け、渡り鳥の群など、自然界の偶然の秩序に着目し、それをデザインに取り入れる視点を持つことが重要です。それは日常の中の「当たり前」に気づき、デザインに落とし込むスキルともいえます。その状態における最適な秩序を形にする——。それが世界各国のブランドと仕事をしてきた私が考える「デザイン」なのです。

※毎年イタリア、ミラノで開催されるミラノサローネ国際家具見本市

- ふかさわ・なおと
- 多摩美術大学卒業後、セイコーエプソン入社。先行開発のデザインを担当。1989年に渡米し、ID Two（現IDEO）入社。シリコンバレーの産業を中心としたデザインの仕事に従事した後2003年、NAOTO FUKASAWA DESIGNを設立。世界を代表するブランドや国内のリーディングカンパニーのデザインを手がける。



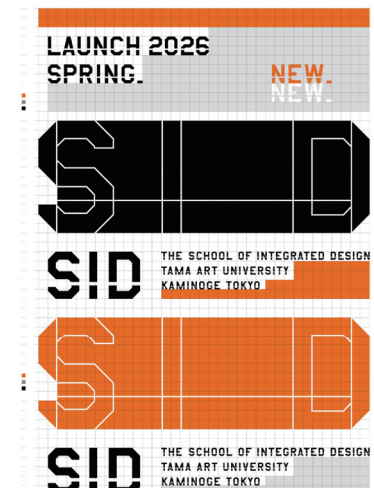
フィラデルフィア美術館での個展

デザイン」といった枠組みに違和感を抱いてきました。椅子のデザインと携帯電話のインターフェースデザインは、まったく異なるように見えて、実際には、「混沌から秩序をすくい上げる」という同じ課題と向き合っているのです。こうした考えから、統合デザイン学科の構想に賛同し、その延長線上に、大学院をつくりたいとずっと考えてきました。そして、学内関係者の理解を得て、ついに実現するのが2026年4月に開設される大学院統合デザイン専攻（SID）です。

目指すのは、カテゴリ化されたデザイン

領域を統合することではありません。ビジネス、サイエンス、テクノロジーなど、他分野と融合しながらデザインの可能性を拡張し、社会に向けて新たな価値を具現化できる人材を育てることです。

社会人になってからデザインに興味を持つ人も多いでしょう。統合デザイン専攻の使命は、美大卒業生に限らず、さまざまなキャリアを持つ人たちが集まり、互いに学び合う「場」を提供することです。ここから世界で通用するデザイン人材を輩出していきたいと考えています。



メーカー

## イトーキ

1890年創業の老舗企業としてオフィス家具製造・販売から、ワークプレイス事業（オフィス空間の設計・コンサルティングなど）や設備機器・パブリック事業（物流施設や公共施設等の設備機器提供や空間づくり支援）を展開。また、最適な働き方・オフィス空間提供サービスの開発・展開も。

## アートな感性と 芯のあるビジョンの融合で、 まだ見ぬデザインの境地を切り開く存在



人事部 人事統括部  
人材開発部 部長

小泉佳子さん

もともとはオフィスメーカーとして始まった弊社の事業は、現在、オフィス空間の設計・コンサルティングといったワークプレイス事業や、物流施設や公共施設などの設備機器提供や空間づくりを行う設備機器・パブリック事業の2つの事業が中核を担うようになりました。さらに、オフィス関連の知見を活かし、さまざまな方法で収集・集積したデータに基づいた最適な働き方・オフィス空間の開発・展開といったデータサービス事業にも注力しています。ミッションステートメントは、「明日の『働く』を、デザインする。」。人を中心に据え「働く」をデザインし、お客様の働く「空間」「環境」「場」づくりを支援しています。

弊社に多摩美の卒業生が入社したのは約20～30年前からで、その後も多くの方が入社し、プロダクトデザインや商品企画など多方面で活躍しています。中津川さんが所属するCMFデザインチームの5名中3名は、多摩美出身者で、市場の必要性等を考慮しながら、各自が感性を活かして仕事に向き合っています。

多摩美出身の方たちに共通しているのは、芯がしっかりしていること。学生時代からさまざまなことに触れ、刺激を受け、自分らしさを発揮してきたからでしょう。皆さん、はっきりとしたビジョンを持って自分の意見を発言できるから、会議の場も活性化します。商品開発の過程では提案されたものに対して、さまざまな部署の社員が意見を述べます。議論の中で他人の異論を受け止めながらも、ネガティブな雰囲気にならず、建設的なコミュニケーションが図れる能力にも長けているため、商品開発が自然とブラッシュアップされていきます。

オフィス空間の中でいかに生産性を上げるか。これまで機能性が大きく問われてきました。しかし、今後は働く人たちが「その空間に集まりたくなる居心地の良さ」といった、空間に内包されるCMFの要素を含めた快適性がより求められるでしょう。そういった観点からも、中津川さんをはじめ、多摩美出身の社員の感性はますます働く人の環境づくりにおいて、重要な役割を担っていくだろうと考えています。



商品開発本部  
プロダクトデザイン部  
CMFデザインチーム

中津川美希さん

(24年テキスタイルデザイン卒)

現在所属しているのは、オフィス家具のCMF（Color, Material, Finish）をデザインするチームです。私たちのチームは、イトーキらしさのデザイン指針として、「ITOKISENSE」という4つのシーズンコンセプトを立ち上げています。時代の流れを反映しながら、配色による印象や素材の肌触りといった五感に訴えることで、働く人の感情や思いに寄り添いエンゲージメントを高めるためのデザインワークをしています。最先端のトレンドや最新オフィスを調査しコンセプトを組み立てるだけでなく、製品のCMFデザインでは、工場に赴き、現場の方とコミュニケーションを重ねて質を高めていくこともあり、仕事の幅が広く、やりがいがあります。

学生時代は自分が好むものや色などを追求した制作が中心でしたが、オフィス家具は公共性に近いプロダクト。だからこそ、経年劣化していくようなものでなく、それらを使用する人たちに長く愛されるものが求められます。学生時代とは違った、新たな挑戦として学び続けられる仕事に携われたことに幸せを感じます。

多摩美ではテキスタイルデザインの知識はもちろん、藤原大教授からの指導で「ものづくりは意味づくり」を強く意識し、制作物について「伝え方の表現方法の大切さ」を学びました。実際、服を制作する課題でも、布をつくり、パターンを引くところから始まり、モデル・カメラマンの手配、写真加工、展示まですべてのディレクションをする。そこまでひくくめて「何を伝えたいか」「どう表現したら伝わるか」など、多くのことを学べた経験は、社会人になってから表現の幅を広げる助けになっています。また、学生生活はユニークなタイプの学生も多く刺激に満ちていました。一方で、「自分はこうだ」という1つの軸を持つ人を見ると、「自分の軸は何だろう？」と、必死に突き詰め模索する日々でした。何気ない日常の中でも、例えば、ある昆虫を見たら「この柄面白いかも」と考えたり言語化したり、自分の作品を顧みながら、「自然や農業」といった軸を見出せたと思います。その後の制作は自信をもって取り組み、卒業作『Farm』では、酪農の課題をただ深刻に伝えるのではなく、ポップに可愛く、前向きなメッセージとして伝えることを意識し、完成させることができました。

大学進学を考える際、アートやデザインに興味を抱きながら、「絵が描けないから」といった理由で、美大をあきらめるのはもったいない。絵がうまく描けなくても、発想や思考することが楽しいと思えるなら、多摩美を目指してみてください。突拍子もない発想をする人に出会え、面白い人脈もできる。私のように高校時代は「フワッとしたタイプ」でも、大学の4年間で自分の軸を確立させることができました。学生生活の中でそれを探す努力は険しくつらいこともあるかもしれませんが。それでも行動し続ければ、きっと自分の軸がみつかり、私は思います。

デザインの世界は既に飽和状態になっている実感があります。その点で、今取り組んでいるCMFデザインは他との差別化になり、これまでにない新たなデザインの価値を示せる領域として、今後はより注目されるはずです。周囲と自分の期待に応えられるよう、これからもデザインの道を歩んでいきたいと思っています。



多摩美出身者は、ビジネスの最前線からどのような評価を受けているのでしょうか。また、その卒業生たちが学んだ多摩美での4年間は、ビジネスの現場でどう生かされているのでしょうか。さまざまな業界で活躍する企業人たちに尋ねました。

本記事は連載企画です。  
さらに詳しい内容や他  
企業情報はWebでご覧  
になれます。



食品

## カゴメ

食品、飲料の製造・販売、種苗、青果物の仕入れ・生産・販売、健康サポートサービスの開発・販売などを手がける総合メーカー。ブランド・ステートメントは、「自然を、おいしく、楽しく。」。

### デザインで価値を伝える力が、 企業や商品のブランディングを 支えている



マーケティング本部  
ブランドコミュニケーション部  
デザイングループ 課長

野村祥子さん

私たちの部署はカゴメ全商品のパッケージデザインをディレクションし、ブランディングを一貫して表現を統一する役割を担っています。マーケティングやディレクション力を含めた総合的なスキルを高め、「カゴメをどう伝えるか」を意識して取り組んでいます。

今、クリエイティブに関わる人に求められるのはデザインの技術だけではありません。開発者の提案をふくらませてお客さまにとっての価値に変換し、明確にデザイナーに伝える力が必要です。また、多くの人が関わる業務でもあるため、プロジェクトマネジメント力も重要です。デザイン組織としては、美意識を持って取り組む姿勢が欠かせません。美大卒の方には、身につけたスキルとともに、心のうちにある美意識を大事にして、それぞれの力を発揮してほしいと思っています。



マーケティング本部  
ブランドコミュニケーション部 デザイングループ

中島天音さん

(23年グラフィックデザイン卒)

私は主に、「野菜生活100」季節限定シリーズのパッケージデザインのディレクションに携わっています。デザインではブランド価値を守りつつターゲットに魅力的に伝えることを意識しています。例えば、子ども向けの「野菜生活100あまなつ&オレンジミックス」では「かわいい！おいしそう！」と思ってもらえるように工夫しました。私たちの業務は開発初期からチームで関わっていきます。ゼロからつくり上げることにやりがいを感じますし、メンバーの皆さんと意見交換し、試行錯誤しながら形にしていく過程は楽しいです。さらに、完成品が店頭に並び、お客さまに手に取っていただけることは大きな喜びです。

多摩美では1、2年生でデッサンなど基礎力を強化することができました。カゴメのパッケージ制作では、果実や野菜の魅力を表現することが大切です。私はディレクションを担当していますが、自分自身に基礎力があるとデザイナーへの依頼がスムーズです。

3、4年生ではプレゼンを重視する教授のもとで学び、「言葉でデザインを表現し、価値を伝える力」を培うことができ、現在の業務に活かしています。また、クラブ活動などで幅広い人と交流し、多様な感性や才能に触れたことも大きな刺激になりました。



メーカー

## 京セラ

総合電子部品メーカーとして、ファインセラミックス技術を基盤に、情報通信、自動車、環境・エネルギー、医療・ヘルスケアなど幅広い市場において事業をグローバルに展開。

### 表現力、造形力に加え、 コミュニケーション力の高さと クオリティアップに貢献



研究開発本部  
統合デザインセンター 責任者

北村和生さん

弊社は技術力と多角化経営を強みに、ファインセラミックス、半導体部品、通信機器、エネルギーなど、幅広い市場でグローバルに事業を展開しています。近年のテーマのひとつが、顧客のニーズに応じた製品やサービスづくりの体制を統合すること。デザイナーがその役割を担い、デザインをハブとするため、仕事は広範囲に及び、重要度も増えています。

現在、京セラには8名の多摩美OBが在籍。共通して造形力や表現力に優れています。多摩美の自由な学びの環境が、豊かな感性を育むのではないのでしょうか。デザイナーの役割は変化しています。当社でいえば、コンセプト力やビジネス視点などが求められるようになりました。そうした新たな役割を頭に置いて、多摩美卒の皆さんの優れた造形力や表現力を発揮してもらいたいと思っています。



研究開発本部 統合デザインセンター  
ソリューションデザイン課

宮崎萌さん

(23年プロダクトデザイン卒)

京セラに入社してデザインの業務の幅広さに驚きました。電動バイク専用のバッテリーステーションの外形デザイン、京セラ主催のトークイベント「異種格闘技戦」のメインビジュアルとなるバナーやSNS広告、フライヤーなどのデザイン、直近では京セラ「ファインキッチンシリーズ」のパッケージデザインのリニューアルを現在進行形で手がけています。幅広い分野のデザインに携わることでデザイナーとして成長し、それがやりがいにつながっています。

多摩美で学び、卒業できたことは、デザイナーとして仕事に向き合う日々の自信になっています。中でも厳しく指導していただいた中田希佳先生存在は大きく、深く心に刻まれた中田先生の言葉があります。プロダクトデザインの既存のアプローチは私には不向きとしううえで、「これからのプロダクトデザインは製品の背景にあるストーリーや体験といった部分まで想定することが大事になってくる。領域が広がっていったときに、宮崎の持つ力は生きてくる」と。期待に応えたいです。また、多摩美には各種デザイン機材が充実していて、入社し3Dプリンターなどの機材をすぐに使いこなせたのもアドバンテージになりました。



## 「アヌシー国際アニメーション映画祭2025」で 修了生の本原正天さんが学生部門の主要賞を受賞

「アヌシー国際アニメーション映画祭2025」にて、25年大学院グラフィックデザイン修了・本原正天さんの作品『Q』が、学生部門（Graduation Films）の主要賞のひとつであるロッテ・ライニガー（LOTTE REINIGER）賞を受賞しました。同映画祭は、1960年にカンヌ国際映画祭から独立する形で始まり、アニメーションに特化した映画祭としては世界最古かつ最大規模を誇ります。コンペティションには、長編、短編、学生、テレビ、受託の各部門があり、いずれも世界中から多数の応募が集まることから、出品・受賞ともに非常に狭き門とされています。

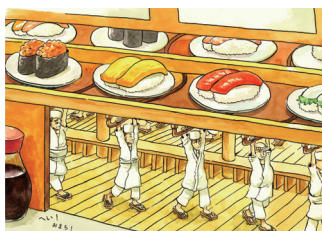
学生部門での日本の大学での主要賞受賞は、16年大学院グラフィックデザイン修了・冠木佐和子さんが『夏のゲロは冬の肴』で審査員賞を2017年に受賞して以来8年ぶり、2度目の快挙となります。また、本原さんは2023年にも卒業制作作品『トモヤ！』が、2024年には大学院1年次作品『ヤボラボンキー』が、同部門にノミネートされており、継続して高い評価を受けています。

本原正天『Q』

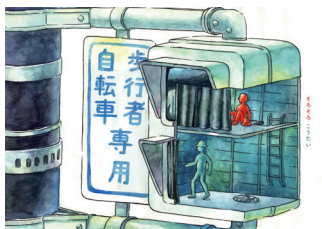


## 「書店員が選ぶ絵本新人賞2025」で 大賞および絵本専門士賞を本学学生がダブル受賞

グラフィックデザイン4年・とくながけいさんによる絵本『みえないおしごと』が、「書店員が選ぶ絵本新人賞2025」において大賞および絵本専門士賞をダブル受賞しました。この賞は、株式会社読売新聞東京本社と株式会社中央公論新社が主催し、商業出版未経験者による未発表作品を対象に、全国の書店員による投票で選考されるものです。また、今回から新たに、絵本に関する高度な知識・技術・感性を持つ「絵本専門士」による投票によって選ばれる「絵本専門士賞」が創設され、189名の絵本専門士が参加しました。とくながさんの『みえないおしごと』は、2025年11月に中央公論新社より刊行予定です。



回転ずしのレーンを回す寿司職人……!?



信号の表記は交代制……!?

## 「SICF26」で在学生の三上めるもさんが EXHIBITION部門の審査員賞を受賞

「SICF26（第26回 スパイラル・インディペンデント・クリエイターズ・フェスティバル）」において、メディア芸術コース4年・三上めるもさんが、アートユニット「mishmash」として制作した作品『Ordinary Bug's』で、EXHIBITION部門の山田紗子賞を受賞しました。「SICF」は、東京・表参道にある複合文化施設「スパイラル」が主催する公募制のアートフェスティバルで、若手クリエイターの発掘・育成・支援を目的に毎年開催されています。ジャンルにとらわれない多様なアート作品を展示するEXHIBITION部門では、100組の作家が5月2日から7日までスパイラルにて作品を展示し、最終日に各賞の発表が行われました。



mishmash『Ordinary Bug's』

撮影：ただ（ゆかい）／写真提供：スパイラル／株式会社ワコールアートセンター

## 大学院生の王欣悦さんが 「東京都公園協会賞」を受賞

大学院建築・環境デザイン・王欣悦さんが、「第60回 東京都公園協会賞」技術部門「緑と水のデザイン特別部門」のU25デザイン特別部門を受賞しました。受賞作の『生きた音まち—音風景の視点をもとに』は、五感を使ってランドスケープデザインに取り組んだ事例として、視点や切り口、具体的な提案内容、わかりやすくデザイン的にも質が高い点などが評価されました。



王欣悦『生きた音まち—音風景の視点をもとに』

## 修了生の鬼原美希さんが 「Art in the office2025」受賞

テキスタイルデザイン修了・鬼原美希さんが、「Art in the office2025」にて受賞しました。受賞作の『福来旗（フライキ）』は、東北地方で福来旗（フライキ）と呼ばれる大漁旗にインスピレーションを得て、展示場所での滞在制作中にライブで手織りされた作品で、作品が放つ圧倒的な存在感、また世界中を旅し手仕事を積み重ねてきたアーティストの一貫した創作スタイルと感性が高く評価されました。



鬼原美希『福来旗（フライキ）』

## 学生ハッカソンイベントで 大学院生の里学樹さんが受賞

LINEヤフー株式会社主催の学生ハッカソンイベント「Open Hack U 2025 TOKYO」において、大学院情報デザイン2年・里学樹さんが、参加者投票1位に贈られる「Happy Hacking賞」を受賞しました。このハッカソンは、学生にものづくりの楽しさを体験してもらうことを目的としたイベントで、参加チームは12日間でアイデアの企画・設計・開発までを行います。発表会でチーム「RePoP」の里さんは、作品『Reldea』を披露しました。



受賞式の様子（写真右：里学樹さん）

## 在学生の関原優奈さんが デザインコンペで入賞

グラフィックデザイン3年・関原優奈さんが、「アドビ認定プロフェッショナル世界学生大会2025 デザインコンペ」において入賞者3人の一人に選ばれました。コンペは次世代のデザインプロフェッショナルの育成を目的として、世界学生大会2025の日本代表を選出する一次選考も兼ねて実施。参加者は公益財団法人WWFジャパンから与えられたテーマ「サステナブルなファッション」に沿った作品2点を制作しました。



「WWFの理念にも通ずるデザイン」と評された関原優奈さんの作品

## 「第73回朝日広告賞」で 卒業生と在学生在が最高賞を受賞

朝日新聞社が主催する「第73回朝日広告賞」＜一般公募＞デジタル連携の部で、24年グラフィックデザイン卒業・馬場陸斗さん、大学院グラフィック2年・角替祐太さんが最高賞にあたる朝日広告賞を受賞、また本学学生・卒業生・教員が多数受賞しました。1952年に創設された同賞は、昭和、平成、そして令和と、各時代のすぐれた新聞広告を顕彰し、広告文化の発展に寄与してきた賞です。



馬場陸斗、角替祐太、他  
『はとバス目線ツアー HATOBUS View Tour』

## 「MOE絵本屋さん大賞2024」で 卒業生が新人賞第1位を受賞

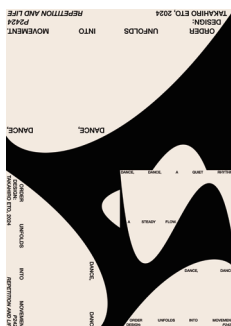
01年立体デザイン卒業・玉田美知子さんのデビュー作『きょうざがいなくなりさがしています』（講談社）が、「第17回MOE絵本屋さん大賞2024」新人賞第1位を受賞しました。同賞は、絵本月刊誌MOEが全国の絵本専門店・書店の児童書売り場担当者3,000人を対象にアンケートを行い、その年にもっともおすすめしたい絵本を決定するものです。同作は他にも第8回未来屋えほん大賞など多くの賞を受賞しています。



表情豊かなきょうざが愛らしく、ストーリーに引き込まれます

## 修了生の畠藤隆弘さんが 国際ポスターコンペでグランプリ

10年博士後期課程修了・畠藤隆弘さんが、世界五大ポスターコンペティションの一つである「ラハティ国際ポスタートリエンナーレ2025 (Lahti International Poster Triennial 2025)」において、作品『Repetition and life: bud, P2424』でグランプリを受賞しました。畠藤さんは、前回の2022年開催のトリエンナーレでもグランプリを受賞しており、2014年のトリエンナーレ形式への移行以降、初の連続受賞者となります。



畠藤隆弘『Repetition and life: bud, P2424』

## 「雪梁舎フィレンツェ賞展」にて 卒業生の森聡さんが入選

06年日本画卒業・森聡さんの作品『遠くに見える木』が、「第27回雪梁舎フィレンツェ賞展」にて入選を果たしました。同賞は、雪梁舎美術館の設立者であり、株式会社コメリの創業者でもある故・持賢一氏の発案により、1999年に創設されたものです。日本国内で活躍する50歳以下の具象系作家の発掘を目的としており、今後の芸術文化の振興および芸術家の育成を目指して作品を募集しています。



森聡  
『遠くに見える木』

## 「フィンランド獅子勲章」を 皆川明客員教授が受賞

テキスタイルデザイン・皆川明客員教授が、フィンランド共和国より「フィンランド獅子勲章 騎士一級章 (Knight First Class of the Order of the Lion of Finland)」を授与されました。「フィンランド獅子勲章」は1942年に制定され、同国大統領がグランドマスター（最高位の授与責任者）を務める国家勲章です。フィンランドに対し顕著な貢献を果たした個人に授与されるもので、各界の功労者が選ばれています。



フィンランド獅子勲章騎士一級章の叙勲を祝う会での皆川明先生

## 「神奈川新聞広告賞」で 佐野研二郎教授が最優秀賞を受賞

「神奈川新聞広告賞」で、統合デザイン・佐野研二郎教授（96年グラフィックデザイン卒業）が、クリエイティブディレクション、アートディレクションした映画『帰ってきたあぶない刑事』の新聞広告が最優秀賞（グランプリ）を受賞しました。クラウドファンディングによるファンの署名をもとにした広告デザインが高く評価されました。



映画『帰ってきたあぶない刑事』の新聞広告

## 「第78回広告電通賞」で教授と 卒業生が最高賞をダブル受賞

「第78回広告電通賞」で、統合デザイン・佐野研二郎教授（96年グラフィックデザイン卒業）と14年グラフィックデザイン卒業・香取有美さんがアートディレクションしたサントリー天然水が「フィルム広告最高賞」と「OOH広告最高賞」をダブル受賞。総合賞もサントリーホールディングスが受賞しました。同賞は、1947年に創設された日本で最も歴史のある総合広告賞です。



サントリー天然水「大自然を味方に」篇でフィルム広告最高賞とOOH広告最高賞を受賞

## 「毎日ファッション大賞」で 皆川明客員教授が受賞

テキスタイルデザイン・皆川明客員教授が、「2025年（第43回）毎日ファッション大賞」において、「選考委員特別賞」を受賞しました。ファッションブランド「minä perhonen (ミナペルホネン)」を創設した皆川明客員教授は、これまでも2006年に「第24回毎日ファッション大賞」大賞、2016年には「2015毎日デザイン賞」を受賞するなど、ファッションとデザインの両分野で高い評価を得ています。



Design = Memory, Sweden Nationalmuseum, photo by Keita Goto

## アートやデザインで防災を探求 「タマビ防災EXPO2025」開催

7月2日から9日間にわたり、「タマビ防災EXPO2025—美大が考える防災のカタチ—」を八王子キャンパスの図書館アーケードギャラリーとアートテークギャラリーで開催しました。このプロジェクトでは、防災においてアートやデザインが果たせる役割を、美術・デザイン・身体表現の力を通じて、防災に対する意識と実践を多角的に探求しました。



5つのデザイン系学科が共同でプロジェクトを実施

## 上野毛キャンパスにて 初の夏祭り「夏宵祭」開催

8月4～6日、上野毛キャンパスにて初の夏祭り「夏宵祭」を開催しました。学生有志が実行委員を組織し、統合デザイン学科や演劇舞踊デザイン学科の学びを生かして、企画・空間設計・演出構成などに主体的に取り組みました。地域の方々も来場し、交わりが生まれたキャンパスは、多様な価値が混ざり合う場として、「自由と意力」の理念を体現する催しとなりました。



「夏宵祭」のクライマックス！近藤良平教授振付のダンスで盛り上げる会場

## 演劇舞踊デザイン学科で 創立90周年記念事業が始動

演劇舞踊デザイン学科は、創立90周年記念事業の一環として「多摩美シアタープロジェクト びびび」を始動、9月に彩の国さいたま芸術劇場にて第一弾『アートマザー』を上演しました。現役で活躍するアーティストでもある教員が協働し、創作・上演を行いました。学生と教員がともに創り上げる、これまでにない取り組みとなりました。



出演者はオーディション、美術・衣裳デザインはコンペティションによる選抜

## 版画専攻の学生を対象に 国立印刷局による特別講義を実施

5月30日、八王子キャンパスにて、日本銀行券（紙幣）やパスポートなどのデザインおよび原版製造を担っている国立印刷局の工芸官による特別講義が、版画専攻の学生を対象に開催されました。今回の講義には、銅版画工房に所属する学生を中心に、学部3年生から大学院2年生までの20名が参加し、対象外の学生も多数見学。銅版画技法のひとつである「エングレーヴィング」を中心に実技指導が行われました。



工芸官によるビュランの実演

## 研究活動

### 2025年度 科学研究費助成事業

#### ●基盤研究 (B) (一般)

深津裕子教授 (生産デザイン学科テキスタイルデザイン専攻)

- ・日本の文様デザインアーカイブの創造—東西文化交流と近代デザインの視座から
- 港千尋教授 (情報デザイン学科)
- ・現代美術の触覚的体験を用いた平和学習のメソッド構築
- 植村朋弘教授 (情報デザイン学科)
- ・保育者コミュニティの形成を促すペダゴジカル・ドキュメンテーション開発と実証研究
- 森脇裕之教授 (情報デザイン学科)
- ・初期メディアアートの総合研究 - ARTECを中心にみる技術と芸術の関係 -
- 楠房子教授 (情報デザイン学科)
- ・博物館における体験が共有できるプロジェクション展示支援デザインの研究
- 栗原一成教授 (絵画学科油画専攻)
- ・「Art & Philosophy」美術教育への臨床哲学対話の応用
- 小泉俊己教授 (絵画学科油画専攻)
- ・1960-70年代の表現行為のアーカイブ：「もの派」を例示として

#### ●基盤研究 (C) (一般)

青木春代子准教授 (建築・環境デザイン学科)

- ・近世ヴェネツィア共和国による帰属都市への建築的介入
- 高梨美穂教授 (リベラルアーツセンター)
- ・移動表現の母語習得と認知発達メカニズムの解明
- ムーニースザン准教授 (国際交流センター)
- ・Immersion through Digital Technologies for Optimal Engagement with Contemporary Art Installation
- 佐竹邦子教授 (絵画学科版画専攻)
- ・アルミ版リトグラフ磨版技術継承への挑戦
- 後藤正矢准教授 (リベラルアーツセンター)
- ・大学における幼稚園教員養成黎明期のカリキュラムに関する歴史的研究
- 木下京子教授 (リベラルアーツセンター)
- ・仏像・仏具・アーカイブ調査研究—アメリカ中西部における日本仏教美術の受容と展開

夏目深雪特定研究員 (芸術学科)

- ・東アジア映画におけるナショナリズムと女性表象
- 荒木慎也特定研究員 (リベラルアーツセンター)
- ・地方都市の美術大学・美術予備校の研究
- 小林亜起子講師 (リベラルアーツセンター)
- ・ルイ15世時代の美術行政と装飾・絵画研究

#### ●挑戦的研究 (萌芽)

楠房子教授 (情報デザイン学科)

- ・科学系博物館におけるA S Dを対象とした色彩デザインガイドラインの提案

#### ●若手研究

原美潮講師 (リベラルアーツセンター)

- ・ファシリテーションスキルを備えた美術科教員養成の理論的・実践的研究
- 井沼香保里助教 (大学院美術研究科)
- ・心霊主義の文学における「代替科学」の展開
- 大岩雄典特定研究員 (情報デザイン学科)
- ・装置の美学：インスタレーション・アートにおける行為と空間のデザイン

#### ●研究活動スタート支援

オウジェームス講師 (リベラルアーツセンター)

- ・日中韓の近代史を題材とする1960年代以降の歴史小説研究
- 前田佳那講師 (リベラルアーツセンター)
- ・北宋前期山水画における小様の機能と役割

#### ●国際共同研究加速基金 (国際共同研究強化 (B))

深津裕子教授 (生産デザイン学科テキスタイルデザイン専攻)

- ・台湾の文様デザインアーカイブの創造—アジアの少数民族文化の固有性の記録—

#### ●国際共同研究加速基金 (海外連携研究)

木下京子教授 (リベラルアーツセンター)

- ・文化メディアとしての書籍研究—トレース・コレクションの目録化と解題作成、理解の促進

## 教員人事

### 訃報

平野拓夫 名誉教授

1970年～  
美術学部デザイン科  
立体デザイン専攻 教授

1998年～  
美術学部生産デザイン  
学科プロダクトデザイン  
専攻 教授

2001年～  
名誉教授

2025/4/23  
逝去 94歳

謹んでお悔やみ申し上げ、  
ご冥福をお祈りいたします。

## 学生団体「Studio hash」が 選挙啓発ポスターをデザイン

2025年実施の東京都議会議員選挙と参議院議員選挙に向けて、大学の学生有志団体「Studio hash」が八王子市選挙管理委員会と連携し、選挙啓発ポスターおよび投票済証（投票を済ませたことを証明するもので、法令で定められた様式ではありません）をデザインしました。完成したポスターは、各投票日まで八王子市内の掲示場580カ所に掲示され、投票済証は、投票を済ませた有権者が職員に申し出ることによって配布されました。



「Studio hash」がデザインした選挙啓発ポスター

## 講談社『モーニング・ツー』で 在学生の漫画が連載開始

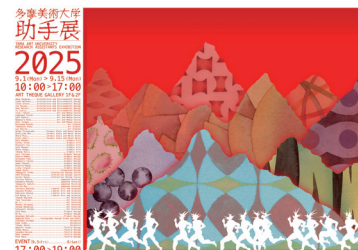
講談社が運営するWeb漫画サイト『モーニング・ツー』で、グラフィックデザイン4年・伊藤九さんの漫画『ランチュウインザスカイ』（全6話）の連載が2025年7月よりスタートしました。伊藤さんは、『モーニング月例賞』2022年9月期にて『かないさん』で佳作を受賞してデビュー。さらに、『第85回ちばてつや賞』一般部門では『つづきのつづき』が入選。これらの作品は講談社の公式サイトで読むことができます。また、単行本は11月21日（金）発売予定です。



伊藤九「ランチュウインザスカイ」

## 「多摩美術大学助手展2025」が アートテークギャラリーにて開催

9月1日から15日間、多摩美術大学の助手・副手ら有志による展覧会「多摩美術大学助手展2025」が、八王子キャンパスのアートテークギャラリーにて開催されました。「多摩美術大学助手展」は、学生や教員を支える助手・副手の研究成果を発表する場として2018年度から毎年開催しており、2025年度は、絵画、イラストレーション、彫刻、立体、写真、映像、インスタレーションなど、多彩な表現による作品が一堂に会しました。



## 野田秀樹名誉教授による 第3回特別ワークショップを開催

演劇舞踊デザイン学科では、大学と演劇界のプラットフォームの役割を果たす取り組みとして、野田秀樹名誉教授による特別ワークショップを開催しました。8月19日から実施された本ワークショップは、野田名誉教授が専任教員として在籍していた2008年から2022年にかけて、正規授業として開講されていたプログラムです。これまでもオープncラスとして、舞台経験のある学外の方々にも広く門戸を開いてきました。



受講生に指導する野田秀樹名誉教授（写真左）

## 演劇舞踊デザイン学科教員による サマースクールを開催

演劇舞踊デザイン学科は、7月29日から8月6日にかけて、進学希望者や教育・上演芸術関係者、地元住民を対象としたサマースクールを開催しました。今回のサマースクールでは、近藤良平教授（コンドルズ主宰／さいたま芸術劇場芸術監督）や野上絹代講師（快快FAIFAI）によるワークショップのほか、進学相談・課題作品展示・3年生による上演演習『うたごえ喫茶「砂箱」』（短い朗読劇）と、多彩なプログラムが、多くの参加者で賑わいました。



入学後の学びを体感できるサマースクール

## 統合デザイン学科による サマースクールを開催

統合デザイン学科は、8月4日から6日の3日間、「ものを見る力」を通じて、デザインの基本となる課題発見力を養うサマースクールを上野毛キャンパスで開催しました。対象は高校1年生および中学1～3年生で、デザインの面白さや美術大学で学ぶことの魅力を体験してもらうことを目的としています。今回のサマースクールでは、「見るための新しい方法」をテーマに、デザインの入り口を体験してもらいました。



身近な商品などの大きさを記憶のみで再現

## TUBによる特別ワークショップを 東京ミッドタウンで開催

東京ミッドタウン アトリウムにて8月9日と10日の2日間、子どもを対象としたワークショップイベント「君だけの絵日記帳をつくらう！」を開催。本ワークショップでは、ものづくりの楽しさと環境について考える機会として、東京ミッドタウン内で出た古紙や布の端切れ、不要になったポスターやチラシなど、様々な素材を活用して、世界に一つだけのオリジナル絵日記帳を制作しました。



世界に一つだけのオリジナル絵日記帳を見せ合う子どもたち

## 子どもに向けた 芸術文化体験プログラム開講

8月19日から11月3日にかけて、小中高生を対象としたネクスト・クリエイション・プログラム「ファンタジスタ」を、東京都、アートカウンシル東京との共催により開催しました。UPCYCLE、生物多様性といった環境問題、社会課題に対して、参加者は本学学生と一緒にアート作品の制作を通して向き合いました。11月7日～9日には渋谷ヒカリエ 8/COURTにて成果報告展示を開催します。



中高生プログラム「UPCYCLE / +3Dプリンター、紙飛行機の飛ぶ原理」

## 連携校の高校生63名が 多摩美で講義や実習に受講

7月19日・31日、8月1日の3日間、八王子キャンパスで、2025年度多摩美術大学高大連携授業が行われました。これは高校生に大学の実習や講義を受講する機会を設ける取り組みです。今年は連携校の生徒63名が参加し、オープンキャンパスでの「はじまりの美術・デザイン」と題したブレ教養総合講座や、油画専攻、工芸学科、建築・環境デザイン学科、メディア芸術コースの実技講座を受講しました。



建築・環境デザイン学科の「空間をつくる・体験する」の実技講座を体験する受講生

## Up &amp; Coming



Up & Comingは卒業生の発表活動を支援し、新しい表現を発信するオルタナティブ・スペースです。アーティストの自己プロデュースによる企画展によって、多くの人びとへ創造のよろこびを伝え、新たな時代精神を生み出す場となることをめざしています。

渋谷区神宮前3-42-18 | 12:00～19:00 (金曜・土曜は20:00まで) | 火曜休場 | 入場無料

10/4(土)ー11/9(日)

## Blurred Boundaries

デジタル界と身体性、日常の風景と既製品、立体空間における平面的視界という出品作家共通の関心事を通して、それぞれの問題意識とその糸口を共有する試み。

出品作家＝大崎土夢、古賀義浩、陳為樺(チェン・ウェイチェン)、細井えみか

前期：11/15(土)ー12/2(火) 後期：12/6(土)ー12/23(火)

※会期中無休、12/3日(水)ー12/5(金)は展示替のため休場

多摩美術大学創立90周年記念事業

## 歴史は繰り返さないが、韻を踏む：Chronicle Vol.3

歴史を複製エラーの繰り返しと捉え、その不安定性を根幹に制作される表象の「アウラ」に焦点をあてる。ドイツと日本を拠点に活動するアーティストによる二期構成の展覧会。

出品作家＝前期：アロン・ヘルドリッヒ、東山詩織、中谷ミチコ、イヴォ・リック、武田竜真 後期：松本奈央子、松延総司、村田啓、小田原ルーカス、ヨハネス・シュベックス



## 多摩美術大学 TUB



“まじわる・うみだす・ひらく”をコンセプトに、オープンイノベーションによる価値の創出、幅広い層に向けたデザインやアートプログラムの提供、学生作品の展示・発信を通してデザインとアートの持つ創造性と美意識を社会とつなぐ場を提供しています。

港区赤坂9-7-1ミッドタウン・タワー5F(東京ミッドタウン・デザインハブ内) | 11:00～18:00 | 日曜・月曜・祝日休場 | 入場無料

11/6(木)ー11/15(土)

## TUB showing 2025

本学在学生対象、学年・学科・ジャンル不問のコンペ「TUB showing 2025」の受賞作品を、東京ミッドタウン・デザインハブ内にある多摩美術大学 TUBにて展示します。

11/19(水)ー11/29(土)

## ひらいてとじるとじてひらく

統合デザイン研究領域・荒牧ゼミ成果展 2024-2025

統合デザイン研究領域・荒牧ゼミに所属する4名の大学院生による成果発表展示を行います。荒牧ゼミでは「動き」「構造」「構成」を研究対象としながらも、各々の探究が独自の表現へと結びついています。身近に潜むハッとする現象や、思わず「なぜだろう」と心を惹かれる仕組み、そして思考を重ねる中で生まれる創造力——それらの探究の過程と成果を発表いたします。

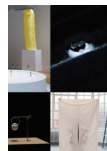
12/1(月)ー1/12(月)

東京ミッドタウン・デザインハブ第117回企画展

## 「植える WELL-BEING」

「WELL-BEINGを満すための知恵と工夫とは」を出発点に、さまざまな方の暮らしや仕事から紡ぎ出された知恵や工夫を紹介し、教育の根底にある未来への種を植える行為と、デザインがもたらすWELL-BEINGの姿を見つめます。

休館：12/27(土)・1/5(月)



## アートテークギャラリー



八王子キャンパス内 | ギャラリー開場時間10:00～17:00(展覧会による)  
日曜・授業日以外の祝日休場 | 入場無料

最新情報は大学HPでご確認ください

11/10(月)ー11/12(水)

## 近代日本の文様デザイナーアーカイヴー東西交流の視座から

11/8(土)ー11/29(土)

多摩美術大学創立90周年記念事業

## 菅木志雄のペーパーワーク Archives &amp; Recent Works

主催 | アートアーカイヴセンター 協力 | 東京画廊+BTAP

## 多摩美術大学 アートアーカイヴセンター



本学に蓄積されてきた芸術資源を保存・管理・公開していく研究教育拠点として、2018年4月に設立されました。現在21の資料体を有し、授業での利用や、制作および研究に役立つ生きた教材とするため、各種資料を整理してアーカイヴを構築しながら公開しています。利用方法はウェブサイトをご覧ください。

もとの派の代表的作家として国際的に活躍する、作家・菅木志雄の未発表ペーパーワークを中心とした2つの展覧会とシンポジウムを開催します。菅木志雄は、多摩美術大学絵画科(現 絵画学科油画専攻)を1968年に卒業し、独自の美術世界を切り拓いてきました。AACでは、「東京画廊+BTAP所蔵資料 菅木志雄デジタルアーカイヴ」と「菅木志雄撮影 35ミリスライドデジタルアーカイヴ」の公開を記念し、菅の未発表ペーパーワークを中心に、作家蔵の近作とAAC所蔵の1970年代作品及び関連資料による展覧会を、また会期中にシンポジウムも開催します。

11/8(土)ー11/29(土)

多摩美術大学アートアーカイヴセンター所蔵資料展8

## 「菅木志雄 1970年代を中心に」

場所 | アートアーカイヴセンターギャラリー

時間 | 10:00-17:00 休館 | 日曜日、11/22(土) | 入場無料 同時開催 | 多摩美術大学創立90周年記念事業「菅木志雄のペーパーワーク Archives & Recent Works」

※「アートテークギャラリー」欄を参照

11/15(土) 13:30-16:00

第8回多摩美術大学アートアーカイヴシンポジウム

## 「菅木志雄 これまでとこれから」

登壇者 | 菅木志雄、光田由里、柏木弘、寺井弘典、吉澤美香

会場 | 八王子キャンパス レクチャーAホール

協力 | 多摩美術大学メディアネットワーク推進委員会 参加無料(事前申込制)

※プログラムの詳細や事前申込についてはAACのウェブサイトをご覧ください。



## EXHIBITION &amp; THEATER

前期：8/2(土)ー11/25(火)

後期：11/28(金)ー

2026年3/24(火)

ベルナル・ビュフェ美術館、静岡

グループ展「アーティストの目は何をみていたかービュフェ、エコール・ド・パリ、そして現代アートへ  
油画・日高理恵子 教授(出品作家)  
油画・村瀬恭子 教授(出品作家)

9/3(水)ー12/8(月)

国立新美術館

「時代のプリズム：日本で生まれた美術表現 1989-2010」

彫刻・笠原恵美子 教授(出品作家)

彫刻・高嶺格 教授(出品作家)

10/12(日)ー12/21(日)

宇都宮美術館

「ライシテからみるフランス美術——信仰の光と理性の光」  
11/23(日) 13:00～17:30  
シンポジウム「ライシテからみる美術、美術史、美術館」  
芸術学・金沢百枝 教授

11/1(土)ー11/30(日)

せんだいメディアテーク

「もうひとつの森 「なにもしない」からはじめるメディアテーク」  
グラフィック・平野篤史 准教授  
(グラフィック、空間デザインなど)

11/1(土)ー2026年2/15(日)

国立新美術館

「コレクション 2」  
油画・高柳恵里 教授(出品作家)

## BOOK



キャラとメルのおかしなパステー

えぐりか 著  
(グラフィックデザイン学科准教授)  
小学館  
5月21日刊  
1,870円(税込)



14歳からはじめるデザイン

永井一史 著  
(統合デザイン学科教授)  
マイナビ出版  
6月30日刊  
2,585円(税込)



かいじゅうたち

石田尚志 著(油画専攻教授)  
ケンエブックス  
7月6日刊  
2,970円(税込)



日本・現代・美術

榎木野衣 著  
(リベラルアーツセンター教授)  
筑摩書房  
8月6日刊  
1,870円(税込)



戦争と万博

榎木野衣 著  
(リベラルアーツセンター教授)  
講談社  
8月12日刊  
1,540円(税込)

「TAMABI NEWS」では受賞や活動報告を募集しています。

メール(news@tamabi.ac.jp)あるいは右のQRコード「受賞・活動報告 投稿フォーム」からお知らせ下さい。



Tama Art University

多摩美術大学 広報誌「TAMABI NEWS」2025年10月28日発行 第34巻 第2号 通巻102号  
発行：多摩美術大学 広報部 東京都八王子市鎌水2-1723  
お問合せ：https://www.tamabi.ac.jp/contact/ki/kaku/ (広報課)

